

学校をつくらう!通信



第152号

学校の役割 その 129

『月間 ヒューマンライツ』2月号(419号)に掲載した文章を転載させていただきます。

「アイヌの文化を尊び学ぶことの意味

—モシリナアスコーレのめざす学校観とは—

日本列島の北と南、アイヌとウチナンチュと呼ばれる方々が暮らしてきた土地があります。現在の北海道と沖縄です。どちらの土地も近代国家・日本により併合されました。そこで暮らしてきた方々は差別と抑圧の歴史を未だ歩んでいます。

僕は日本列島も日本という国家制度もその他諸々も自分で選んで生まれてきたわけではありません。予め用意されていた環境の中に産み落とされるのです。ここで生きて行きなさい!命は条件付きで受け取らざるを得ません。命は付き物付なのです。物心がつき始め、やがて日本について気付いたことのひとつは花綵列島と呼ばれる南北に連なる島国の自然の素晴らしさと、その素晴らしさとは裏腹の北と南の先住民に対する視線と行為のみっともなさでした。自然の素晴らしさも、社会のみっともなさも命の付き物でした。

学生の頃、東西南北日本列島を旅するうちにふと舞い降りた言葉、気づいた者が出来ることをする、この独り言が僕の人として生きる上での立ち位置になりました。個の尊重という視点を大切にする立ち位置です。人類の長〜い歴史の途上で夥しい理不尽の堆積と、幾許かの先達の命がけの思索と行為のお陰で今、人が手にした価値、これも僕の命の付き物でした。しばらく前まで人はそんな価値を知らなかった。大切にしたいと思います。

宮沢賢治の「なめとこ山の熊」の中で猟師の小十郎は否応なしの付き物を因果として受け入れていました。しかし、物語の語り手は小十郎を見下す旦那に対し「こんないやなずるいやつらは世界がだんだん

進歩するとひとりで消えてなくなっていく」と強い言葉で口をはさみます。「世界がだんだん進歩して行く」、自分がすることが例えば焼け石に水のようなことかも知れないけれど、それでもそれをし続けること、それが「だんだん」という言葉の意味だと理解しました。だんだんがあつて進化がある、進化という言葉より僕は変容という言葉が好きですが、しかも、楽しんでし続ける。そんな自分を手に入れることを手助けするのが人の学びであり、学校も、とりわけ義務教育段階の学校もその役割を担うことが出来ると思っています。日本の学校制度の変容を促す「だんだん」を僕と同行者はしていると思っています。

大学を卒業し、ひよんな切っ掛けで教員になりました。やがて、教員として北海道と沖縄でできることをしたいと考えるようになります。僕が提案する小さな学校作りを沖縄の場の力を借り、沖縄の方たちと作りたいと決めました。私立高校の校長を辞め、知人、友人はいませんでしたが沖縄に移住しました。4年後の2001年4月珊瑚舎スコーレを開設しました。沖縄の言葉と歴史・文化などを教材として取り入れたカリキュラムで授業づくりをする無認可学校です。

20年後の2021年4月、自前の校舎を沖縄県南部の南城市佐敷に建て、那覇市の賃貸ビルの校舎から引っ越しました。それと同時に学校法人雙星舎を立ち上げ高等専修学校珊瑚舎スコーレ高等部を開設しました。無認可学校の初等部、中等部、夜間中学校も一緒に引っ越しました。「狭いながらも楽しい我が舎」と生徒、保護者、スタッフ、講師のみなさんはそう受け取ってくれているのではないかと思います。

雙星舎という学校法人名の雙星はふたつ星のことです。星の一つは沖縄の珊瑚舎スコーレ、もう一つが北海道札幌に2025年4月開校を予定しているモシリナアスコーレです。日本列島の南と北で星のように輝く小さな学び舎を運営する学校法人、それが

雙星舎という法人名称の由来です。校名のモシリナアのモシリはアイヌ語で大地という意味です。ナアは沖縄の言葉で庭のことです。北海道の大地の庭に建つ小さな学び舎です。

スコーレについても、ご存じの方がいらっしゃると思いますが、ちょっと触れさせていただきます。もとは古代ギリシャ語で暇とか余暇など、時間的なゆとりを意味する言葉です。生き物に与えられた時間の殆どは採食、繁殖、休息に費やされますが、人はそれ以外の時間、スコーレを手に入れました。スコーレはやがて人々が集い学び合う場の意味を持つようになります。英語のスクールの語源にもなります。スコーレの意味の変容は人の特性を表していると思います。この変容のプロセスを持つ言葉が日本語にはないので校名に使わせてもらっています。

雙星舎が北海道で開設準備をしている学校はモシリナアスコーレ中等部(中学校)、初等部(小学校)、星観中学校(夜間中学校—学齢期を過ぎた義務教育未修了者等対象)の3課程です。高等部(高等専修学校)は北海道が設置基準としている定員は80名以上となっているため、雙星舎が考える高等部の規模(定員42名)とはかけ離れているため断念しました。雙星舎は生徒、スタッフ(専任教員)、講師がお互いを固有名詞で呼び合える100名を上限にした学校作りを基本にしています。

モシリナアスコーレは3課程ともアイヌの言葉、歴史、文化等の教材を豊富に取り入れたカリキュラムで授業を中心とした様々な活動が行われます。それらを通してそれぞれの生徒が自己の変容を体験する学びを作ります。学校はそれを手助けする場です。アイヌ関連の授業や教材もそのために使わせて頂くと考えています。アイヌの言葉や文化・伝統の保護・継承が目的ではありません。主体は個々の生徒であり、その変容の手助けをするに余りある世界がアイヌの言葉、歴史、文化等には広がっていると受け取っています。教材化はアイヌやウチナンチュなどの少数民族に対する差別、抑圧ではなく敬意、尊重の姿勢が生徒の中に育まれるものです。雙星舎の基本理念、個の尊重の下に作られる授業等は対等

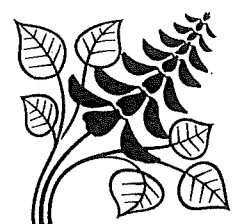
な対話なしには成立しないからです。排除、拒否は対話を成立させません。

また、教材化は学校生活という生徒の日常の中にアイヌの時間を具体化するものです。初等部1年に入学した児童が中等部を卒業すれば9年間アイヌの時間を主体的に過ごすこととなります。その時間は博物館や資料館、あるいはイベントなどで用意された時間とは違います。日常との連続性が希薄で、補完的な要素の強いものと日常そのものとの違いです。日本の学校、とりわけ義務教育段階の学校はそれぞれのカリキュラムで少数民族関連の授業を常態化しなければならないと思っています。平和に対する学校の役割もイベントのような平和教育ではなく、学校生活の日常の中に平和を考え、求める学校作り、授業づくりが必要だと強く思います。

話しはガラリと変わり、現実的な寄付金募集の内容になります。モシリナアスコーレは2025年4月の開校を予定しています。そのために今年の3月末(学校設置認可申請書提出期限)までに4億円の寄付金を集めなければなりません。

私学振興のために国が作った制度があります。受配者指定寄付金制度です。企業、法人等、団体は寄付金すべてを損金扱いできる制度です。また、特定公益増進法人に対する寄付も税制上の優遇措置があり、学校法人雙星舎は特定公益増進法人に指定されています。雙星舎の学校作りどうぞ、ご協力ください。

原稿の締め切りが過ぎています。手直しせず、そのまま転載しました。最後に書いている授業を常態化し、学びを体験化することについては半端な内容ですので、それを中心に書き換えようと思ったのですが、改めて別の機会に学びの体験化について書くことにします。(ほ)



がじゅまる しんかめちゃー



(生徒・学生のコーナーです)

「とうんじーあしび」 初等部 仲里 成矢
 今年のとうんじーあしびはどこか去年とは違った。準備期間中も本番も楽しい、凄い出し物があったと思う。今年のテーマは「軽便鉄道と落し物と1000年後の天ぬ浜」テーマでさえ面白い。準備期間中は去年と同じオープニングを考えると言う係をやることにした。一緒にやっていた2人は面白い考えを出すから、去年と違う楽しいものが作れた。そしていろいろあった中で1番、去年とは違う凄いものはモンピだ。今年のモンピは派手だった。去年はここで「とうんじーあしび」がやってると言う看板だけだったけど、今年は順路を作り順路の周りをイルミネーションを飾り、途中に草のリースを飾って今回のテーマである機関車をどんと飾ってすごかった。やってるときはあまり見れなかったけど終わってからみんなで感動した。

悪かったところもある。準備期間中も合わせて去年と違って内容がちょっと楽しくなかった部分もあった。まず準備期間中は人数が多くて手が空いてる人がいた。出し物は準備する期間が少なかったのであんまりいいのができなかった。来年は今年よりも去年よりもよくできるといいな。



珊瑚舎スコーレの新年は「新春朗読バトル」で始まります。初顔合わせには「自作の2作品を持ちよる！」というお約束。この自作品で1回戦、2回戦と挑みます。負けても敗者復活戦で勝ち進む事が出来るので最後まで気を抜くことはできません。準決勝は事務局が用意した詩を、決勝では会場からお題をもらい即興で作った作品を朗読します。自分の言葉がいかにか聞き手に伝わるか。朗読はもちろん選ぶ言葉や内容も勝敗を左右します。優勝者には「珊瑚舎杯」と「チャンピオンバンダナ」が贈られます。ホッシーからスペシャルプレゼントのキャップ(hhマーク付き)が贈られました。

決勝戦に際し「ざわざわ」「うさぎ」「鏡」「ヴェルステアス」「黒板」「怪獣」他たくさんのお題があがりましたが、今年選ばれたお題は「たんす」。お題に挑んだのは決勝に勝ち進んだ高等部のユウマとカイ。即興詩の朗読でチャンピオンの座に輝いたのは、ユウマでした。2人の即興作品を紹介いたします。

～決勝戦 お題『たんす』～

「たんす」 盛口 海
 ガラガラと古いタンスの底をさぐった。タンスを引き出して、カビの匂いと古い防腐剤の匂いが鼻の奥をツンとさす。

衣服、本、手紙やハガキ。少しシミがついて茶色く黄ばんだそれらからは、懐かしい匂いがした。



「たんす」

長藤 祐真

小4の頃からか、僕のうちのダンスの上には、人形がたくさん入ったダンボールがある。僕は小4の頃はそれが届かなかった。なかなか届かなくて、他の本棚の上からのぼって、ダンスの上まで行って、人形をとることがとても好きだった。だが今はそうではない。今は成長して、ダンスから人形が届くようになっている。

一番下の弟は人形が届かず、なかなか自分から取れず、そして僕やもう一人の弟に人形を取って欲しいと頼む。それが懐かしくて、僕と母親を見ているようだった。

ふくぎのふぁー



(講師・スタッフのコーナーです)

「アケビ」

大橋 史葉

昨年9月、キッズ(未就学児～小学校3年生までのクラス)のサポーターとして仲間入りさせていただいた大橋史葉(スイミー)です。“英語”、“数と記号”などを担当しています。それ以前は、環境調査会社で主に生き物の調査などに関わっていましたが、子どもが生まれてからはほぼPCと向き合う日々だったため、スコーレでの時間はとても新鮮です。

がんまりへ通うようになり、古民家の梁の上から「名前は一?」と聞いてくる子ども達や、集団で襲ってくる蚊、ちょっと歩けば姿をみせるカナヘビなども仲良くなってきた頃、私の家に内地の実家から様々な秋の味覚が届きました。

せっかくなので、英語の授業に持ち込み“Fruits Party”をしました。みかん、りんご、栗、マスカットなどのそれぞれの名前や色、味を英語で表現しながら堪能した後、最後に子どもたちの前に「アケビ」を差し出しました。「What's this?」と聞くと、「腐ったバナナー!」の大合唱。切って断面を観察し説明するも「早く食べたーい」と急かされ、スプーンですくって味わうと「甘い!」「Sweet!」とまた大合唱。へんてこな見た目と野性的な食感、甘みが子どもたちのツボにはまったのか、未だに英語の授業の前には「アケビ」コールが起こります。

手間暇かけて育てられた“高品質”の果物たちを抑え、山のふもとに生えていた野生のアケビが絶大な人気を得たその理由は、“体の時間”で散歩をするうちにわかってきました。

田舎育ちで植物好きな父の影響で、私も小さい頃から目に付いた“食べられる”植物を口にしてきました。散歩の際に子ども達がクワの実やムラサキカタバミの花を食べるのを見て「懐かしいなあ」なんて思ったのも束の間、ゲットウの実、モモタマノの実、リュウキュウマツの葉、軽石までも口にすると子供たち! 図鑑に“可食”と書かれていないものも次々と味わっていくのです。私も勧められて口にしますが、あまりおいしくない……。でも、どんな味がするんだろうというワクワクとこんな味がするのか! という発見になぜかちよっと満足するのです。子ども達はきっと、アケビにこの感覚を味わったのでしょう。

スコーレに身を置くようになってまだ4ヶ月余りの私ですが、様々な授業や行事の際、水面に広がっていくカラフルな波紋のような感覚を得ることがあります。誰かが企てたほんの少しの仕掛けに呼応して、参加者が個々の色を出しながら波を起しそれが周りに伝播して波はさらにカラフルに大きく広がっていく……。その波に揺られるのはとても心地がよく刺激的です。

そんな“極上の一滴”とまではいかなくとも、まずはアケビを超える一滴を垂らせるよう、凝り固まった頭と体をほぐしつつ精進していきたいと思います。

スタッフ紹介



「結塾 J&S 西原教室」

兼城 勇吾

はじめましての方がほとんどだと思いますので、軽く自己紹介をさせていただきます。

私の名前は兼城勇吾と申します。珊瑚舎スコールが運営する結塾 J&S 西原教室スタッフとして勤務しています。アルバイト講師として、小、中学生の授業をしていた期間も含めて、約7年働いています。

結塾で働いた期間で感じたことは多々あるのですが、最近私が特に考えていることを今からお話させていただきます。それは、生徒と私との間で様々なギャップを感じるということです。私は普段小、中学生との関わりがメインですが、以前アルバイト講師として働いていた頃よりも、そのギャップは大きくなってきていると感じます。例えば、生徒間で流行っているゲームや、SNS、言葉などを聞いていて思うこともありますし、もう一つは、一緒に学習している時や、世間話をしている時に、「なんでこう考えるの?」「別の方法だともっとスムーズにできるのに…」等と思うこともあります。こうしたギャップは、特に今年度感じるようになり、初めは子どもたちとの年齢差が広がってきたからではないかと考えました。ただ、生徒との相性の問題なのか、もしくは他の要因があるかもしれないので、何が理由なのかははっきり分かっていませんでした。

そのギャップを埋めようと日々模索していたのですが、普段メインで授業を担当するアルバイト講師と楽しそうに話をしているが、私と話すときは、そうでもない生徒がいた時に悩み、自信を無くすこともありました。また、生徒だけではなくて、アルバイト講師と色々な話をするときも、ギャップを感じる場面もありました。ここ数年は、私と講師の年齢差が広がっており、昨年度から一回りの年齢差の講師も働いているという現状もあります。やはり年齢差が影響しているのかと考え、自分の中で無理やり納得していました。

ある日講師と話している時いつものようにギャップがあると思いながら会話をしていた時に、本人のバックグラウンドや、趣味や嗜好などを考えながら話をしてみると、話の内容がずっと理解できました。その時、生徒とコミュニケーションを図る際に、本人の背景等を軽視して、自分自身の経験則で判断していたことに気づきました。私が中学生の頃は、経験則で語る大人が一番嫌いなタイプだったはずなのに、いつの間にか自分がそうなりつつあるものすごく反省をしました。そのことを考えてからは、意識して生徒と接するようになり、ギャップを感じることは少なくなりました。

結塾で働き始めたころの私は、生徒のいい所に焦点を当てて伸ばすと同時に、生徒だけではなく、私自身も一緒に成長するという気持ちでしたが、いつの間にかそういう気持ちが薄れていたと思います。大人や子どもに関わらず、皆それぞれ個性があり、それぞれが自分のいい部分を伸ばしていけるような場づくりをしていきたいという、原点に戻るいい経験だったと感じました。



～学び舎の一風景～

2017年、韓国の濟州島から中学生が珊瑚舎を訪ねてくれました。その橋渡しをして下さった方から、今回も平和学習として沖縄を訪れる学校の生徒達と珊瑚舎の生徒達との交流をする機会を作ってほしいと連絡がありました。実行委員を募り、どのような内容で迎えるか、生徒達は短い時間の中でそれぞれやれるだろうことを出し合いました。実行委員からの感想を紹介します。

「韓国交流会」

高等部 大多和 翔

12月15日待ち望んでいた、プルンスプ学校(韓国シユタイナー教育の学校)が平和学習ツアーでこの珊瑚舎スコーレと交流会をしました。交流会が決まり学校でも韓国語を勉強する機会が出来ました。それまで知らなかった韓国語の簡単な挨拶や自己紹介、会話などを勉強して自分達が迎える側なんだと再認識してやる気が次第に湧いて来ました。

そして当日、プルンスプ学校の人たちが来て目の前にするとドキドキで口数が少なくなってしまいましたけど韓国語を喋ると、オォー！とみなさん歓声を上げ僕たちは、少し照れながらとても嬉しくなりました。プログラム内容は①珊瑚舎スコーレ学校紹介②プルンスプ学校の学校紹介③グループに分かれてアイスブレイク④プルンスプ学校の出し物⑤珊瑚舎出し物、の五つをやりました。プルンスプ学校の人たちは日本語で学校紹介をしていてこの交流会にすごいやる気がミシミシと伝わって来ました。

アイスブレイクの時にはグループの中で自己紹介をしてお互いの好きな物を紹介して、その時にも韓国語で言おうとしてもなんて伝えればいいのか分からなくみんなジェスチャーや英語とかで伝えていき、K-POP やアニメの話がよく盛り上がってました。出し物では、僕たちは三線の「ていんさぐぬ花」とK-POPのWA DA DA'(ワダダ)を踊りました。WA DA DA'を踊っている時韓国の曲なので皆さんとても喜んでくれました。プルンスプ学校の出し物はピアノ、バイオリン、フルートの演奏でした。色々な楽器の音でとても感動しました。沖縄と韓国は少し似ている部分があり、韓国の歴史を知るとその中にはたまたま沖縄の歴史の事も出てきたりして話はずきません。そう言うご縁があり時間は1時間半と言う少ない時間の中でしたが、とても良い経験をしました。またご縁があったらこっちがプルンスプ学校に行きたいなーと強く感じました。



韓国式日本式、ジャンケンポン



～子どもがんまりだより～

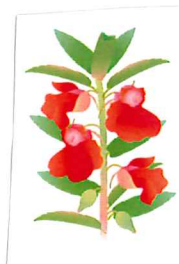
*今回は沖縄大学の盛口満氏ことゲッチョ先生とゼミ生達のワークショップでした。参加者とゼミ学生達の声を紹介いたします。



「初めて参加した“子どもがんまり”で感じたこと ～違いを超えた学び合い～」

北澤 若奈(参加保護者)

「カマキリがいた！」その声に、みんなワクワクした表情で生け垣に集まってきました。いくつもの視線が葉と葉のあいだを行ったり来たりしながら、カマキリを見つけた子の指している方向を見つめます。カマキリを捕まえると、「ハリガネムシいるかな?」、「お尻を水につけてみよう!」、「ハリガネムシ出て



くるかな・・・。」とこどもも大学生も大人も一緒になって盛り上がり、その場の興味関心はカマキリからハリガネムシへ移っていきました。

今回、親子で初めて“子どもがんまり”に参加して、私が一番印象に残ったことは、教える側/教えられる側という関係性が入れ替わる瞬間がいくつもあったことです。ゲッチョゼミ生による授業は、こども達からのリクエストに応じて寄り道をしながら展開されることもあり、言葉のキャッチボールやユーモア、遊びを通して、こども達が楽しんで学びを深めていました。年齢や経験、立場の違いを超えて、お互いに学び合えることを“子どもがんまり”の活動を通して感じました。

初参加の息子は、山がんに到着して早々に、新しい場所や初めて会う人達を前に緊張し、「もう帰りたい・・・」とつぶやいていましたが、“麦わら”や“竹”といった本物の教材を使い、工作を交えながら進む授業に次第に夢中になっていき、「～したい」が増えていきました。特に、カタツムリの殻と竹で作る弓矢はお気に入りだったようで、矢の部分が折れると、「どうやったら補修できるか？」を家に着いても考えていました。

また、自由時間に遊んだターザンは、身体を上手に使わないと止まらない点が刺激的だったようで、今も時々思い出したように「がんまりのターザンは、こうやって（足で木を蹴って）止めるんだ。」と言い、練習をしています。

在籍中の公立小学校では授業がとても長く感じ、少しずつ学校が苦手になりました。心で感じたままを書いた作文を先生から否定されて、見本通りに書くことを求められてからは、大人数の教室で授業を受けることが難しくなりました。

こども達の興味関心や好奇心の芽を摘まずに、それらを学びに繋げ、考えたことや感じたことを伝え合ったり、受け止めたりする経験を重ねる中で、人は成長していくと思います。大人の考える正しさを押しつけるのではなく、こども達の視線や言葉、想像力などから私自身が学び、行動することから始めていきたいです。

当日、ご一緒した珊瑚舎スコーレのスタッフの皆さ

ん、保護者の方々、講師の盛口先生、ゼミ生の皆様、楽しい時間と多くの学びをありがとうございました！



<ゲッチョゼミ生からの感想>

尾崎 憲太

ワークショップには小学校低学年が来るとイメージしていたが、未就学児が多かった。授業が始まる前は、子どもたちも自由に走り回ったり遊んでいたりと元気で活発な様子が見られた。そのため、授業で話を聞いてくれるか不安な面もあった。授業が始まると、竹に興味津々で前のめりになりながら話を聞いてくれた。ある子は、興奮しながら両手で葉っぱを投げたり。静かに座り聞く子どももいれば、立ち上がりいつも発言しながら聞く子どももいて見て面白かった。私は、補助として子どもたちの後ろから授業を見ていた。そして、竹でストローや笛を作る際には子ども一緒に作業をした。のこぎりやドリルを使ったことのない子どもたちばかりだろうと想像していたが、思っていたより子どもたちは器用に道具を扱っていた。のこぎりでは力が入りすぎていて危なっかしい場面もあったが、後半では慣れてきたのか上手に竹を切っていた。中には、作業に飽き外へ行く子どももいた。ちょうど私も作業が一段落し退屈だったので一緒に抜け出した。その後は、十分程度昆虫や草花を観察した。子どもたちは昆虫の名前や生態珍しさなどを説明しながら捕まえたものを見せてくれた。私の知らないことだらけで感心させられた。

後半では、竹で弓を作った。一度は飽きたり退屈していた子も弓を作って競争するというと目を輝かせて教室へ走っていった。授業の中ではいくつもクイズを出したが、私たちが想定していた答えとは違うものがたくさんでた。それだけではなく、パンダの肉からささを食べるようになった理由については小学生に補足された。私たちより小学生の方が詳しいと感じた。

今回、がんまりで授業をしたが目の前で授業を受けている子どもたちを見れてよかったと思う。どんなところに興味を持ってくれるのか、逆にあまり反応がよくないのはどこなのかなど子どもたちの様子を見られて勉強になった。また、機会があれば参加したい。



知念 和花菜

私はこのワークショップで弓を作る担当でした。どこから子供たち自分自身でやらせるかをみんなで考えてやりました。穴を開けて紐を通して完成までを子供たちにやらせることになり、実際にやってみてちょうど良かったなと思いました。自分は弓の作り方を忘れていたので、あまり上手に教えられませんでした。

全体を通して、子供たちの反応が良くて嬉しかったです。ノコギリなど少し危険な道具も多かったですが、みんな上手に使えていてすごいなと思いました。積極的な子たちばかりでやりやすかったし、一緒にやっていて楽しかったです。

授業終わりのマシユマロ焼きもみんな楽しそうで美味しそうに食べていて癒されました。帰り際にやった、コマやけん玉などの遊びも楽しかったです。現代の遊びは、ほとんどが電子機器を使った遊びになってしまっていると思うので、このような電子機器を使わない遊びに触れる時間はとても大事なと感じました。



© 和花菜 和花菜のイラスト



★ ★ 事務局便り ★ ★

★今号の「学校の役割」にありますようにモシリナスコーレの設立準備が本格的に始まります。皆様にはカラー印刷のチラシを同封させて頂きました。新しい学校、校舎を作る場合にのみに適用される法人・企業・団体むけの特別な税の優遇制度(受配者指定寄付金制度)があります。また個人・企業・法人・団体で寄付された方々への所得控除制度があります。ご協力よろしくお願いします。詳細は事務局にメール電話でお問い合わせ下さい。

★初等部のアートタイムの時間が楽しそうです。のぞいたら10メートルほどの絵巻を3本製作中でした。各グループごとにモチーフが違っているようで、図鑑を手にしたり、切り絵をつくったりとみんなの手と口がよく動いています。後期学習発表会の展示が楽しみです。

★ ★ ★

●今年度(12月1日～1月31日)寄付・カンパを頂いた方々

石野裕子市野寿子大城喜春小渡律子鹿糠文子北上田登久子城間あずき当山幸江長嶺由紀子真津昭夫矢崎智章山田道子湯本貴和與儀勝子与那覇晴海石田みどり竹内新仲村宮子横山真弓萩原真照本祥敬岩月住江三枝菜美子所扶久代手塚賢至大城博三浦幸子式部恵子森口美千恵丹羽雅代家門収一上田秀一盛口佳子橋川由美子助川寿美子武田富美子辰巳万里子安里桂子安田直美下地孝法岸曉美城間栄順村上呂理鈴木和男安里洋子岡村健長堂忍平良栄吉照屋まち子藤原良子大久保博之新垣佳良宏新垣由美子岩間つぐよ三枝日出夫嵩元のリ子宮里敏子松永さみ松永来夢東さよみ関正一名嘉光夫大城弘小松直人杉浦俊一郎中村美津子石川信江當間ハツエ知念敏則齋藤光子辰巳万里子向山みちこ瀬底純子長嶺潤子大垣千鶴太田紀子小野寺玲

発行者 : 珊瑚舎スコーレ

事務局 遠藤知子 樋口佳子

住所 : 〒901-1414 南城市佐敷津波古 509-4

Tel : 098-975-7781 Fax : 098-975-7783

Mail : info@sangosya.com

URL : https://sangosya.com